202312　口語詩句 12 月総評　　龍　秀美

＜総評＞
　今月は応募数が多かったこともありますが、非常にさまざまな傾向のバラエティに富んだ作品がみられました。選者各人も専門外の作品を見る目を要求されているように感じました。

ピアノさぼった僕を
殴る母
ねぎのにおいがした

長谷川柊香　宮城県
――希望と欲望はよく似ている。理想と現実も。それらを「ねぎのにおい」が見事に繋いでいる。

方言をかわいいって言う君がいて
いつもより少なめにする塩胡椒

小島　涼我　東京都
――方言にちょっとひけめを感じていた作者。「君」の言葉をまだ受けとめかねている気持ちが二行目によく表されている。

月までの距離を教えて
Alexa に問えば
「心中をお考えですか？」

源楓香　東京都
――ＡＩのむちゃぶりは意図的ではないだけに、時に新鮮な世界を見せてくれる。

冷たさをどうして青と思うのか
高額当せんのせんはひらがな

あお　奈良県
――確かに赤は冷たくはない。しかし青が冷たい保証もどこにもない。宝くじの「当せん」は籤で当たる場合をいうらしい。つまり保証はどこにもない。この二つを繋いだ面白い発見。

朝焼けの大きい蒸気の町に住む

玻璃　愛媛県
――温泉郷なのだろうか。太陽光が水蒸気に拡散されて町全体が朝焼けに包まれる。「朝焼けが大きい」という表現が新鮮。

「戦争を知らない」と言うことに
何故、幾許かの後ろめたさがある

大嶋　碧月　兵庫県
――生まれた時代、今いる場所。それによって負わされるものが違う。戦争の時代に生きていても必ずしも戦争を知っていることにはならない。今が戦争の時代でないとも言えないように。

ひにん。
って、赤えびみたい
生きたくて、
急に浅瀬を後ろ跳びする

大嶋　碧月　兵庫県
――命の先鋭さと本能的な動きをたとえた「赤えび」という喩が見事。

黒で『赤』と書くと
不思議はなくて
赤で『黒』と書くと
違和感がある

柘植　雅一　愛知県
――黒で書く赤は意味で、赤で書く黒は反意味なのだろうか。言葉が持っている機能の不思議さ。

比喩のため
つれてゆかれるカメレオン

雲理そら　大阪府
――変化する物の代表のように言われるカメレオン。安易な比喩に利用されるのは彼にとって迷惑かも。

天国じゃみんな、名前を忘れてて
さいごのごはんの献立で呼ぶ

雲理そら　大阪府
――恣意的に付けられた姓名にはそれほど意味は無く、意識に残る最も大事なことは食べた物だという。認知症の最終段階では自分の名を忘れるという事実も思わせられ、ユーモラスな中に恐怖も潜む。

レジュメでは
せせらぎさえも聴けるほど
しずかなひるの東部戦線

雲理そら　大阪府
――惨憺たる事実の東部戦線も歴史になり、要約や報告の中では静まり返っている。
今月のこの人の作品では、実際の事物や事実と、言葉の機能とが乖離するありさまが鮮やかに描き出された。

土に背を預けて眠る花びらと
駆け引きをした風の歯車

常田　瑛子　山口県
――梢から離れて土に到着するまでの花びらの旅は、風との関わりのなかにあった。人生を思わせるような美しい一句。

ツノから馬が
生えたから
ユニコーンはユニコーン
なんだよ

余剰な卵　福島県
――どう考えても重荷としか見えない付属物を持つものがある。しかしそれがいつの間にか存在意義を持ってしまうことも。

人だけで構成されてるバスのなか
胸にはなったおとなしい鹿

藤井　柊太　神奈川県
――自分でも気付かないうちに養っていたものが、集団のなかで不意に意識されるときがある。たとえ穏やかでも、それは異質な世界への旅立ちとなるもの。

お父さんどうして僕を愛せずに

石橋トミ　東京都
――「愛さず」ではなく「愛せず」という言葉には無数のドラマが潜む。